

# 小樽港防波堤施設(北防波堤、南防波堤、島防波堤)が 国の重要文化財に新指定 ～百年を超えて小樽港を激浪から護り続ける長大な防波堤～

北海道開発局 小樽開発建設部 小樽港湾事務所

このたび、小樽港の三つの防波堤(北防波堤、南防波堤、島防波堤)が、文化審議会文化財分科会での審議・議決を経て、重要文化財に新規指定するよう文部科学大臣に答申され、令和8年1月15日の官報告示をもって、「小樽港防波堤施設」として正式に国の重要文化財となりました。

小樽港防波堤施設の重要文化財指定は、北海道開発局の土木構造物で初となります。

(登録の概要)

小樽港防波堤施設 3所(写真1、図1)

北防波堤 延長1,559.9m(完成年：明治41年)

南防波堤 延長914.8m(同：大正前期)

島防波堤 延長915.5m(同：大正9年)

附 旧北防波堤斜塊1個、銘板4枚

(所在地)北海道小樽市手宮1丁目地先、同築港地先、同築港2番2号

(所有者)国(国土交通省)

小樽港防波堤施設は、北海道における海陸運輸の要衝として発展してきた小樽港を、激しい波から守るために築られました。整備は二期に分けて行われ、第一期工事(明治30年～同41年)では北海道廳技師であり「港湾工学の父」と称される廣井勇(小樽築港事務所初代所長)(写真-2)が中心となり、北防波堤が建設されました。廣井は風や波、地質の調査をはじめ、海底地盤の強さ、捨石の挙動、



写真-2 廣井 勇



写真-1 小樽港防波堤施設

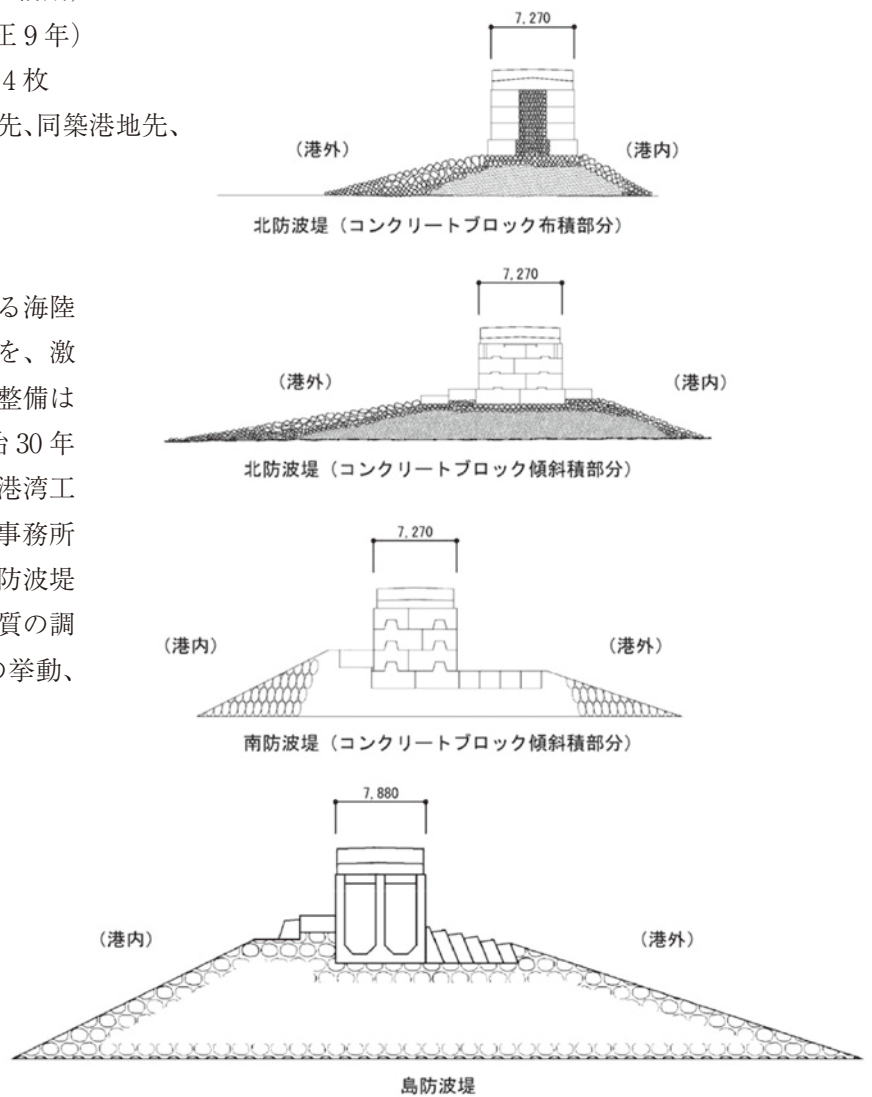


図-1 小樽港防波堤施設 断面図

コンクリート強度など、数多くの入念な調査を重ね、その成果を設計・施工に反映させました。また、施工においては英国製の機械を取り入れるなど、当時としては先進的な工夫も取り入れられました。

続く第二期工事(明治41年～大正10年)では、廣井の計画を踏襲しつつ最適化を図り、北海道廳技師の伊藤長右衛門(小樽築港事務所第三代所長)(写真-3)が中心となって南防波堤、島防波堤、そして北防波堤の延長部が整備されました。こうした取り組みにより、小樽港は近代北海道の物流と産業を支える重要拠点として機能するようになりました。

小樽港防波堤施設は、巨大なコンクリートブロックを傾斜して積み上げる手法(写真-4、5)や鉄筋コンクリート製ケーソン(写真-6)による安定性に優れた構



写真-3 伊藤 長右衛門

造体と、火山灰を混合した経済性と強度を両立したコンクリート技術により、竣工から100年以上経過してなお激浪の衝撃に耐え続ける、明治期及び大正期の最高水準の港湾技術で築かれた土木構造物です。また、日本人技術者が調査、計画、設計、製作、施工までの全てを統括して完成し、北海道開拓の重要拠点である港湾都市小樽の発展を支え続けた記念碑的な大規模港湾施設でもあり、近代港湾史上、価値が高いものとして、重要文化財の指定となりました。

小樽港湾事務所では、先人たちが築いた技術力と挑戦の精神を受け継ぎ、これらの歴史的資産の保全と活用に一層取り組んでまいります。

なお、当事務所併設の「みなとの資料コーナー」では、廣井勇や伊藤長右衛門らが手がけた小樽港防波堤施設に関する貴重な資料を展示しています。小樽へお越しの際には、ぜひお気軽にお立ち寄りいただければ幸いです。

【見学可能時間】 平日9:00～16:30

(※土日祝・年末年始を除く)



写真-4 傾斜積ブロック

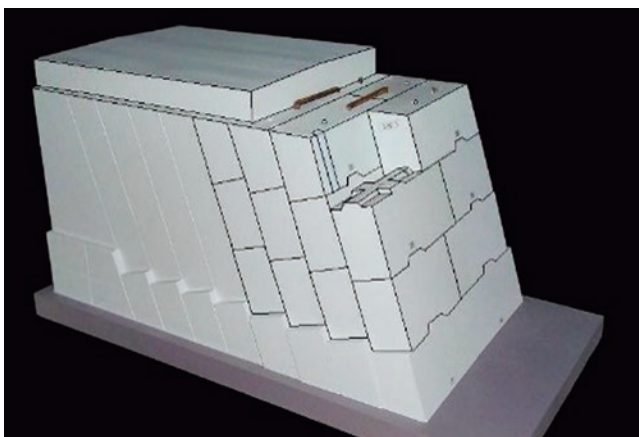


写真-5 傾斜積ブロック(模型)

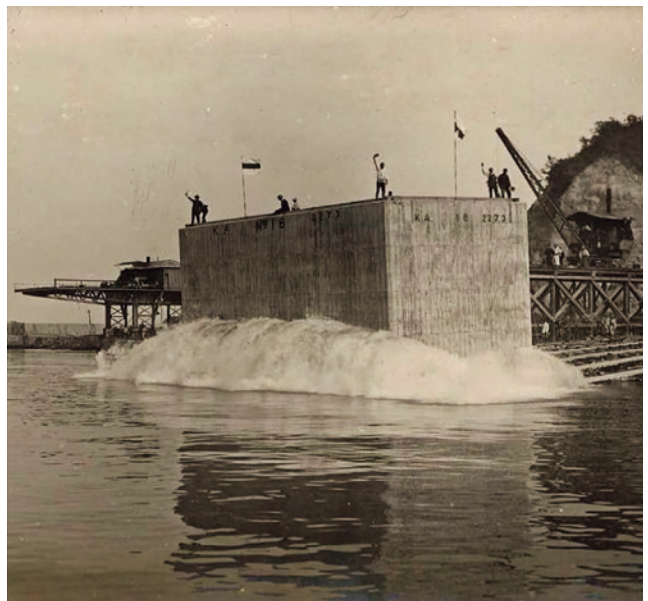


写真-6 鉄筋コンクリート製ケーソン

